まず、自分がすっきりするために言いたいことがある。そのことをまず話そうと思う。僕が六歳の時に親が離婚した。そのことについて自分が思うことを伝えます。

お父ちゃんおかあちゃん僕はあの時離婚してほしくなかったです。どんな形でも三人で生きていく道を考えてほしかったです。僕の一番ほしいものorほしかったものは、お父ちゃんとおかあちゃんと三人で過ごす日々でした。今年の夏に離婚した時のことを聞きました。そのときに、僕は自分の気持ちを言いませんでした。言えませんでした。僕は今でもあなたたちに遠慮しています。それは僕のせいで離婚したんじゃないか、と思った六歳の僕が今も僕の中にいるからです。

それが嫌だった時もありました。でも今は感謝しています。それがあったからこそ今の僕があると、この一年で少し思えるようになったからです。

今までありがとう。これからもよろしく。

では気を取り直して。

専攻科の日々は短かったが、なかなかに濃い時間だった。常に自分の最大値を求められる毎日。いつも同じところで躓いてしまう自分。説明されれば分かるのにそれに気づけない自分。しかしそれだけでなく、少しずつ任されることによって感じる信頼、ちゃんと最後まで自分の話を聞いてくれる安心感、家族の一員として認めてもらえる喜びもあった。そんな浮き沈みのある10か月間で見つけた、なりたい自分と求めるもの、やりたいことをここで話そうと思う。

　まずなりたい自分だ。自分で自分を走らせる自走式な人間になりたい。自分は感情に支配されやすい性質を持っていると感じた。具体的には、明生さんの言葉や言い方、任されたことをできない自分への怒り、その日の体調に身を任せてしまう。この性質のメリットとしては、感情をくみ取れる分緊急性を理解できるし、作業をきちんとこなそうとするし、体調のいい日は最高のパフォーマンスができる。この性質のデメリットは、安定しないことだ。いちいち感情に支配されてうまくいけばいいが一つ失敗するとどんどん止まらなくなり、自己嫌悪をしたり大きな失敗につながったりする。これの問題点は軸を他人に置いていることにあると思う。自分はやりたいことがあまりないので、誰かが頼んだり求めてきたりするほうが動きやすいと思っていた。それは他人に依存しているともいえるだろう。エネルギーを自分で作り出すか、外に求めるかで安定感は全然違う。これからは、自分を動かすエネルギーを自分で作り出せるようになりたい。

　次に、自分の芯となるものを求めたいと思う。自分は何があってもこれだけは、みたいな芯がないように感じた。そのせいで感情に支配されやすくもなっているとも思う。この性質のメリットは人に合わせやすいというところで、デメリットは流されやすいところだ。この専攻科中に自分は、神という概念があったほうが納得できる出来事が何度もあった。ないと納得できないといったほうが近いかもしれない。十一月に藤原家の七男種宇君がなくなった。二か月半という短い人生だった。この出来事は、僕にいろいろな感情を抱かせた。まず理解できなかった。なぜ、なぜ、が頭を支配した。少しして悲しみが来た。もう会えない、成長していく種宇君を見れないということがひたすらに悲しかった。自分にできることがあったんじゃないか、気づけたんじゃないかとも思った。気づいたらなぜ種宇君は死んでしまったのか考えていた。理由を見つけないと納得できなかった。でもわからなかった。考えてわかることじゃないとも思いながらそれでも考えていた。お葬式の次の日に明生さんに言われた。「家のことで忙しくなるから畑は愛希に任せる」と。「そのために種宇は生まれてきたのかもね」とも、はっきりとは覚えていない。でもその話をして、何かが自分の中ですっきりした。種宇君に今、すべきことを与えられた気がした。自分はそのためにここにいるのだとはっきりと解った。今振り返っても種宇君が二か月半で天に帰った理由はわからない。でもあの出来事が、種宇君の周りの人たちに何かを与えた。牧師さんが言っていた、すべてのことには意味があるのだと。そう思うしかなかった、あのときから二か月余りがたった。種宇君の死の意味はまだ解らない。その意味を作るのは自分だと思う。わからなくていいとも思う。それは、神様はすべてわかっていて見守ってくれていると感じたからだ。

行きたいところに想像と違う道を通っても気づいたら行きたかったところにいたみたいな。それは想像と違う状況だったとしてもその時自分にできることを精いっぱいやった結果いけるかもしれない。というアバウトなものだが。うまくいかないこともあるかもしれないが、後悔しないために精一杯かんがえてやるのだ。でもまだ神に任せても後悔しないほど、考えたこともないしやったこともない。だからこれからは一つ一つのことに対して、もっと真剣に向き合っていきたいと思った。

　最後に、自分のやりたいことだ。自分は農業をやりたいと思って愛農に入って専攻科に行った。でも専攻科を過ごして、自分のやりたいことは農業ではないかもしれないとも思った。働くのは好きで、専攻科の一年で野菜が育っていくうれしさも味わった。今まであまり出てこなかった自分でやりたいことが、出てくるようになった。そして迷いが生まれている。自分は、たくさんの人と生きていきたいと思っていた。それは愛農での生活が楽しかったからだ。愛農のような場所でこそ自分の力を出し切れると思ったからだ。今はそうでもないとも思えてきた。愛農という大きな枠組みの中でそれぞれが思うことを実践していく。そんな先輩たちを見て、それもありだと思った。まだ迷ってもいいのだと気付いた。なのでまだ答えはないのだけれど、少し自分のやりたいことの輪郭が見えてきた気がする。それをもっとはっきりとしたものとするために、ぼくは来年アジア学院に行こうと思った。愛農とも専攻科とも違った環境に自分を置いてみたいと思う。そこで自分が何を考えて何を感じるのか、今から楽しみだ。アジア学院は働くことと生きることがつながっていながらもきちんと二つが立っている気がする。それは自分のやりたいことに近いような気がする。

　最後に今感じていることを話したい。僕は今まで生きる理由がほしいと思っていた。10か月を過ごして僕はたくさんのものをもらったと感じた。今の自分に見合わないくらいの大きなものたちだ。それらの多くは物理的なものよりも精神的なものだ。そしてそれは言葉で伝わったものではなく、日々の中で少しずつ自分の中にしみこんでいった。たくさんの人やモノがたくさんの影響を与えた結果今の自分があると気付いた。それらを途切れさせたくないという気持ちが芽生えた。それだけで生きる理由は十分な気がする。これから少しずつ消化して自分なりに次につなげていきたい。まだまだはっきりとしないが、これが私の歩む道だ。